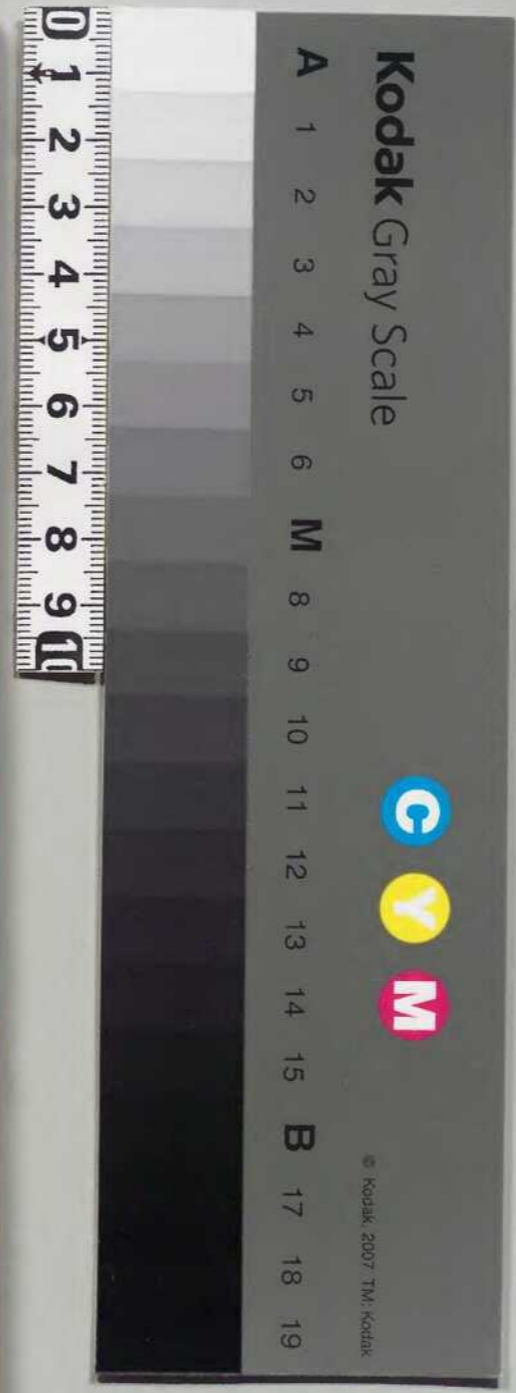


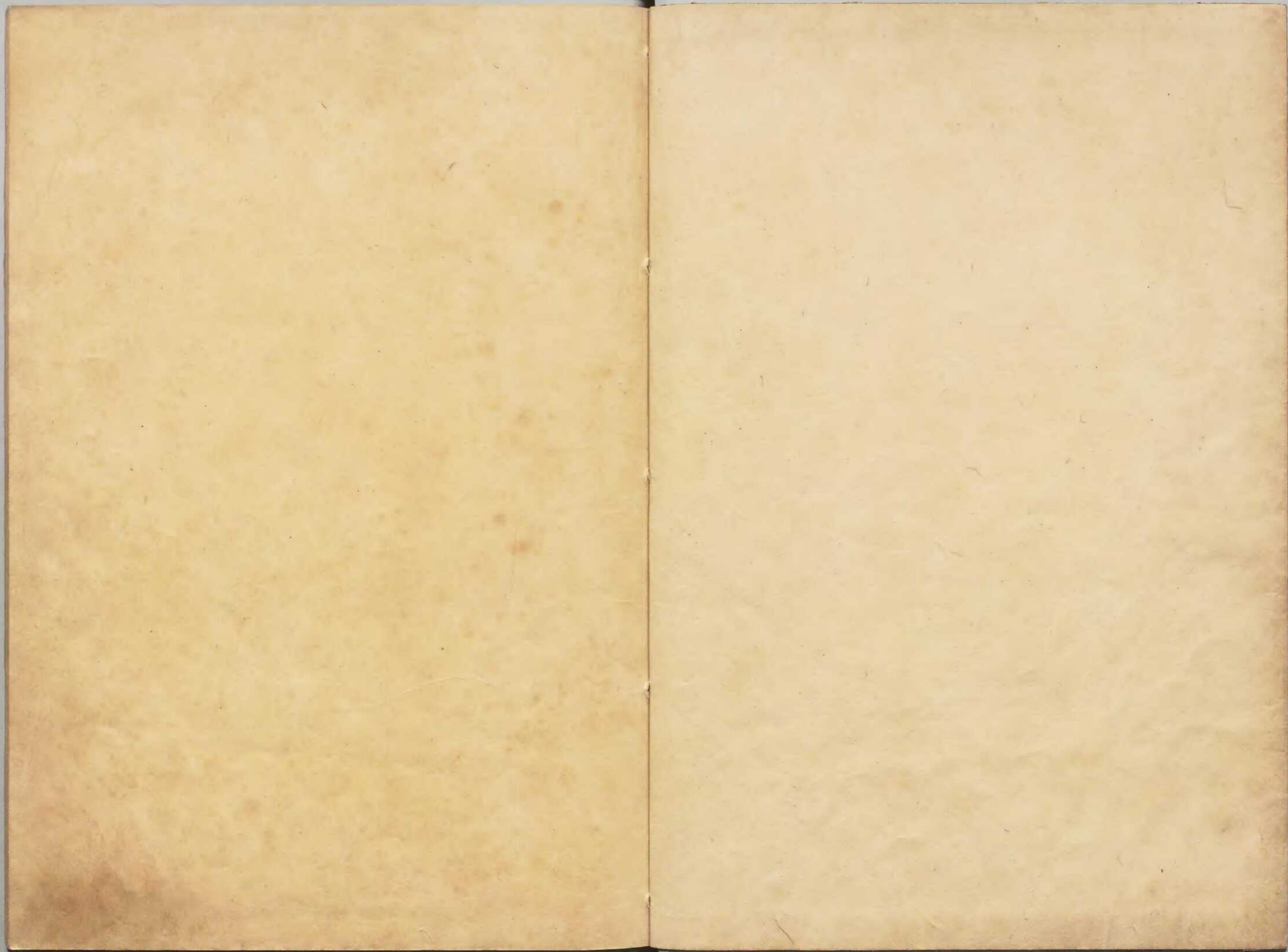
寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内六
秀郷流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (92)		
函號	76	1	



裏面記載のない箇所は省略





皆川

太田

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丙六小家

秀卿流

皆川

大織冠八代

● 秀卿

依藤太

返四位下

武藏守

村雄乃一男母下野掾麻鳩女

天慶三年平氏將門をら川

淺草文庫

是よりして武蔵下野兩國
任止

千常ちんじょう

左衛尉

近江下

兵守府將軍

文脩ぶんしゅう

内舍人

近江下

兵守府の軍

兼光かねみつ

左馬允

陸奥守

近江下

兵守府の軍

頼行たのゆき

近江下

兵守府將軍

成行なりゆき

近江下

兵守府

行方ゆきかた

太田大吏おののこ

下野介しもとのすけ

行政ぎょうせい

吉田別当よしののりとう

太田大吏

宗行むねゆきとありし

行光ゆきみつ

曰郎いっしやう

政光まさみつ

小山曰郎こやまのいっしやう

下野大掾しもとのおほのすけ

法名建西ほつなけんせい

朝政あそ

同下野守

後五位下

法名中ほつなちゆう

宗政むねまさ

長泥五郎ながぬいごろう

或在中泥あるちゆうぬいとあり

後五位下

淡路守あはぢのすけ

納光

結城七郎 五位下 上將介

法名目阿

依礼是利と同等

時宗

五位下 淡路守

政能

左衛門尉

政綱

左衛門尉

宗貞

皆川孫四郎 左衛門尉 法名建光

宗長

四郎左衛門尉

宗村ムラ

淡路八郎

法名覺空カウ

宗俊ムネトシ

淡路四郎

元名宗忠ムネタカと号す

法名宗覺ムネトシ

秀俊ヒデトシ

又四郎

宗則ムネノリ

又四郎

宗常ムネトシ

又四郎

文明三年二月二十四日

廿六日

宗系 しゅうけい

之河守 これがわのり

後五位下

顯宗 けんそう

之河又四郎

宗泰 しゅうたい

又四郎 左衛門尉

時村 ときむら

善室七郎 ぜんむろしちろう

秀行 しゅうぎょう

後五位下

越前權守 えつぜんごんす

判官 はんぐわん

正平年中乃人

宗秀 しゅうしゅう

長沼淡路 ながぬまたんろ

新左衛門尉 しんざゑもんゑ

觀應年中乃人 くわんおうねんちゅうのひと

宗親

駿河権守

返り位下

今按ど侍り官本の系図よしの乃
席次頗お違れ侍りまらんとし
志づくそ家傳を記し友本の
系図をうくに書しそ異を

あらし

兼光

頼行

武行

行号

行政

行光

政光

朝政

宗平 しげひら

長沼駿河守
元中 げんちゆう 年中の人

秀行 ひでゆき
宗親 むねちか

宗秀 むねひで

宗泰 むねやす
時村 ときむら
宗貞 むねさだ
時宗 ときむね
皆川 みながわ
中沼 なかつま
室 むろ

政融 まさゆき
時宗 ときむね

宗政 むねまさ
朝光 あそみつ

秀直 ひでただ

淡路守

義秀 よしまさ

淡路守

應永年中の人

波光 なみてる

二郎

早世

憲秀 のりひで

童名 亀鶴丸 淡路守

實名 義秀の子なり

秀光 ひでみつ

長沼紀伊守

暮齡九十六歳

秀宗 ひでむね

長沼淡路守 法名華屋

持氏没落のとき猛倉中比淡路

といふ一家より死す向中

浪人となり於此時下野國皆川より

五十余郷を領し中興也

光泉 ひかり

和光院 中納言 天石宗

氏秀 うぢひで

長沼淡路守 法名竜騰

宗成 むねなり

皆川宗内が輔

下野國壬生よりといひて戦死也

法名心月

成勝なりかつ

皆川山城守みながわのやましろのかみ

謙余義氏けんよぎしのとき家の證文あかしがたをりんぐ
あつひもはと号と法名建隆けんりゅう

俊宗とよむね

皆川山城守

相氏あいらし没落ぼつらくの後のち冥東えいとう八列はつれつ乃なり諸士しよしをり

と國乃城くにのしろこりりひひ隣境りんぎやう也
たふ俊宗とよむね幼少わらわもり殺傷ころし戰場せんじやうり
のそひとよも勝利しやうりをえすと
と形かたちあつひも同必どうひつ要撃やうげき後訪山ごぼうさん
れあ城しろを攻せうりく依地よちと或あるも壬午にんご
りりひひ卯うの刻ときもり亥ひの刻とき
よとりてつらひを伏ふ血ちをくく
壬午にんご乃西にし皆川みながわの東ひがしり台たい戰場せんじやうとる
はとらあり

天正元年九月一日四十九歳
て死す 法名文勝 道号傑岑

廣照

山城守 老圃と号す

母を水若菜のしとめ

永禄五年武田信玄小茶氏康と

氏茂婚す

廣照十曰歳少くして甲

冑を帯りて十七歳乃とき父が命

をうけく兼守郡をりてこれび入

城を攻めしむる父とおかしく

てりて板本の城を小山高綱を

討捕凡三十歳此日自身得てこの

首級七合見廣勝死してのち家

督を治きてよりこのる身首を

とくとも或る作竹とくくひを

小田原よりたたくふと數年

とふ志れどもはあり勝利を失
りふ

天正八年中川市古志尉を奏者と

して

東照大権現乃幕下り殿一君臣
乃礼をふりて川心

同十年

大権現一供をて織田信長
戸内山信長とてに明智とて

弒されくは遠州濱松小を
いさ甲州新府乃陣をつとむ
同十年小糸氏政兵を殺す
とてく志平山一城郭をつとむ
是をふせ

大権現此とき上使之人とて申川
市古志尉天野孫之内海とて等
とてに籠城一軍をとりてのら
濱松一とて之を戦乃始終を

にげしつ川内是りしりしりしり
翌年

大権現より軍旅乃賑とて英令

之百安とてしりしりしりしり

鼓林結城小山等此言戦りしりしり

小せとてお乃軍回あげしりしり

海りしりしりしり

長六年正月朔日

大権現乃命よりて戻り下りしり

そのち 作しりしりしり上 總介忠輝

のり親父とのお平や練言しりしり

ぬととととととととととととととと

しりしりしりしりしりしりしりしり

かろしり

元和九年二月より沙救免ありて

將軍家よりしりしりしりしりしり

けいしりしりしりしりしりしりしり

城門と出入り

寛永四年十二月廿二日八十歳
卒を 法名 善勝院を之徳
と号す

隆庸

元ハ重宣 従五位下 志摩守 坂山城守
母ヲ中御門宣綱カヒスル
号又長五年

右徳院殿 一 志摩守 戸川

宇部左陣 此時二十歳あり
又那須大田原の戦 といひ 系勝
陣とそめり

右徳院殿乃沙供 一 戸川 信朝
其回 一 又大坂 一 従五位
同年

右徳院殿右大将 一 任 一 志摩守に任
隆庸 一 五位下 叙 一 志摩守に任

同十年

右徳院敵涉叅

内乃刻

大指現乃為命をかりし日涉儀代の列

了くしり供養の騎馬十六人の

中に作とあれ又廣照回功あるを

くしり志しりとしり又廣照也

りしり涉劫氣をかりし日て

同十九年大坂一とひく井伊

掃部以直者より一属

陣母あり 翌年大坂再陣乃とき

五月六日若江乃戦場よりをひく

高名を同七日味方少やうしりとき

隆庸ありしり井伊直孝同家入

これと志しり

元和九年又とおろしく涉ゆられ

とかりあり

將軍家より

宗富 むねとみ

市正 いちのただ

成卿 なりなり

又三郎

秀隆 ひでたか

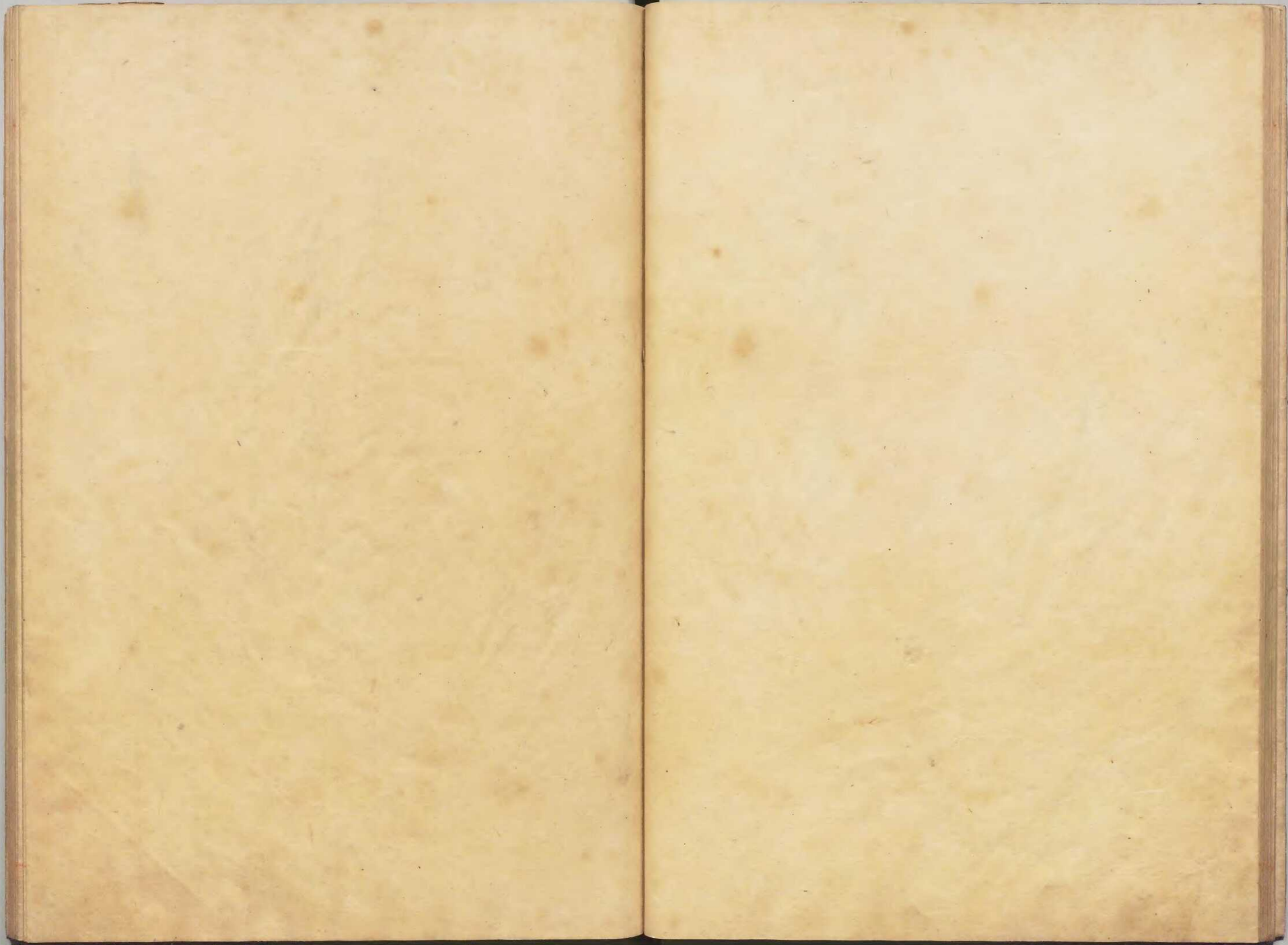
又七郎

成之 なりゆき

三太郎

家紋

二頭 ふたがしら
七巴 ななごしら



右置

太田

甚田節

廿四冬河

清康君了了子川内

右房

甚田節

廿四同友

廣忠卿より下戸川向
天文十三年之別之末乃城より
とひく戦死と

吉勝

是の節のら吉大丈とありし心

廿四回

十八歳乃とき

東照大権現より洋場へくつ

弘治三年

大権現参列徳川列屋より進發

ありく一日より之度より

吉勝先よりけみく徳をあらと

その場よりあり者も矢回作十郎

太田孫吉史より翌日いざ見へふ

とき新屋乃城下十八町縄より

といて首級をゆり

永禄十一年

大樽現遠別懸川沙奈向れとき

根小屋をやめんとし海ふ志れ

しりあし吉勝酒井と口節をのり

高圓了達しれをやんとふ

大樽現吉勝を御前よりめられその

らりしとを沙らりしを

志らりしと海ふこれゆり吉勝

初そしたとのび乃ものまて城戸に

ををそくし根小屋より火ををか

川敵兵これとぬせぐとあし

元龜元年に別嬬川吉勝乃時

吉勝一日りよしびくく首

み級をぬら

同之年武田信玄之方原又出陣の

とき大沢左衛門中安共部かゆる

水之海の遠別堀に乃城ををそ

らんを以て乃つげあり

大樽現これを書下松平之麓より

者勝を以て大沢在東の依が戸あり

堀江乃本城乃如礮より中安を二

九月居志あ終ふ十二月二十二日

信玄演松よりせしむるとき堀江の

城下を以て此とき者勝矢を

んより甲士一騎を射にす志より

とりしとき敵兵ありくさくさ

若し一回二十之日三方原一戦の後

信玄瑞陣乃とき堀江乃城を以て

ふ中安外曲輪を以て二九月を以て

てぬせましくらんとりし者勝こ

れを以てしひらりきり外曲輪

を以て兵を以てむるときは敵

兵勝りの日よりしは水城

あやうかりんとき川あり内を

かきしる

大樽現に此とて紙に所蔵あり
糧米ありて大皇木を給ふ
本田中在るこれより
天正三年冬別長瀬合戦
供奉と川とあ首級を給ふ
同年遠別小山合戦乃
麾下了居一こころ
首級を給ふ
同六年駿別遠目合戦乃

供奉と川とあ又首級を給ふ
長十三年武別一を
死に法名は恵

吉正

是四郎 のら吾ち史と号と
七回回前
くは是崎之節信康自よつふ
信康之所遊をのちいま

大樽櫃を洋一〜〜月つ〜
遠別遠月台鏡一〜吉正石川
伯耆守敷正一〜属一〜朝比奈
駿河守の家人の江奈小隼人水
く〜〜首を〜〜於そ〜〜ち〜〜れ
〜

大樽櫃一洋錫一〜〜石川内
こりちき吉正十八家より
遠別二候乃城一勝頼出陣は

とき味方乃軍兵これをも〜
安次有連の〜吉正はみ
〜敵を〜石川敷正これを
制と〜〜〜て敵を
〜〜〜敵兵は〜
とき安次あり〜吉正は
〜〜〜

同國立花台合戦のとき敵兵城
中〜〜い〜〜ふ〜時味方

先陣とて敗軍を留りしもの
安友次古来のりびよる吉正あひし
にともみく繼をあたしこいよと
く味方乃軍勢くくあつて敵を
をよ敵兵敗走しし城より
門をとらぬ

天正十二年

大指現尾列早崎乃城を征伐し
し向ふとき同國磐江乃城より

安使を早崎しし城を征伐し
とらるるを海より一人を吉正これ
を斬削しししれを吉正これ
くその首をとらし一人を
城中よりとらししらぬ

同十八年小田原陣 同十九年

奥列陣 文禄元年 朝鮮陣 亦

大指現し供奉し

享長五年

徳院殿信州上田河邊殿乃とき

詔 信州河邊殿乃とき

川こめとき中山勅解由あしび

名正沙同付とありく奥平大膳亮

がゆりありときり城中央より

足物さうし鉄砲をとらち甲士

馬上よりさうしこれを下知と

名正さふら馬のつらさを

まじ敵兵これをたぐ城中央に

名正さうし教をさうし城戸は

しましりりぞんとき向とき敵兵

又城をいりこれをうしんとし時

了中山勅解由は太師物小野

次郎右衛門あしきに鉄をあらせ

名正さうし射ころゆい敵兵又城

りりこいにさうし味方川ちりぞんと

まらとき敵又さうし見さうし名正

備ぶその場をきりぞいんと二人を
射倒中山己下乃三人銃をりて
敵兵ををいしむ引退とこあり
敵又之ーあんとこ乃ときを正矢
麻をかりゆるとりともあくと
うすしそ又二人を射倒つわ
敵ゆるりしりらぞ敵兵又
いささらときり鎮目市左束門
らせし見銃をあんとを正矢又

しきかー徳目りいといと
通し矢をけふとき敵とく
退敵とを正矢射倒らるの前後
のち細野橋と物今冬尾川
ありといとこ乃ときを正軍
とそりゆ

台徳院殿乃沙勒氣とくゆこれり
よりて其回師守りあけし
ひく吾妻り一遊らそめら

これ止か信乃領地をいふ

同十九年大坂陣乃とき

作をかりぬり沙目竹とありて

右徳院敵り信乃

元和元年大坂陣乃とき

嚴命りりて沙使番とあり先

陣とせせのころ八月七日首級とる

り沙陣乃のら右乃軍四より

く取信乃いふ

同二年 作ぬりて布衣を著す

同之より沙弓と力十騎同心二十人を

あ川

寛永九年より

將軍家よりつて川口食邑を

く

同十年 作りり川口沙旗を

と

同十五年三月二日武列より

台流

死す 法名惠順

小之郎 のち台兵束尉と号す

廿四回前

十五歳ありとす

大権現を降しし川内

十八歳より病ありて屏括と

次勝

宗兵束尉 廿四武苑

元和六年

台徳院殿より洋湯しし川内

同八年涉小將継りし列し

番子川とす

寛永十年 食邑より川内

台流

平右衛門尉 廿四回前

寛永九年

將軍家を降しして戸川内
同十一年食禄をこまふ

台次

十在集耐 のち若吏と号す

寛永十二年

將軍家を降しして戸川内

同十三年沙小姓繼りて入る

川と

同十六年父名正の遺物をたす
ら

台次

徳右衛門尉 牛酒目兼

寛永三年

將軍家を降しして戸川内

同四年沙小姓繼りて列して

番と川と

同五年食邑をこまふ

家紋

片端車カタヘマクルマ

夕顔ユヅリ真マコトあり

● 正勝

太田

四節左集射

廿四之河

廣忠卿了了了了了了

正次

又十節

廿四同矣

東照大権現トクニ一トクニ一トクニ一トクニ一トクニ

正直マコトコト

加兵束尉 生國回前

大権現トクニ一トクニ一トクニ一トクニ一トクニ一トクニ

子川コカハと心

長ナガ十六年十二月四十二案ニ

一トクニ一トクニ一トクニ一トクニ一トクニ

正忠マコトコト

加兵束尉 生國山城ナニノシロ

元和四年六月

將軍家トクニ子コ孫ニ礼レ子コ

同九年十一月トクニ沙ニ小ニ姓ニ繼レ乃レ書ニ

川カハと心

寛永八年トクニ正マコト月ツキ一トクニ日ヒ大オホ沙ニ書ニ

つツ心ココロ

心成

又右兼門尉 中園武茂

元和二年

右近衛殿 許錫

寛永四年

將軍家

家紋 片輪車

正勝

太田

歌在忠の尉

三別堀海部平田の庄

了

廣忠卿了了了了了

正道

甚九郎

世國冬河

母を言ふにうらな東の室光の女

少年より也

東照大権現よりつるつる戸つる

天正三年五月廿一日之別長藤

合戦のとき二十一歳にして討死

法名津島

清正

甚九郎

後教右衛門と号をも 世國

尾法

実名高木甚太郎清方の子正道が

姪なり正道よりふるまひ也

大権現乃鉤命よりふるまひ正道の家

督をつまひつる川は高木

氏々事々高木甚次郎の系也

Handwritten text on a vertical strip of aged paper, likely a manuscript or document fragment. The text is written in a cursive script, possibly a historical form of Japanese or Chinese calligraphy. The characters are dark and appear to be ink on the aged, yellowish-brown paper. The text is arranged in two main lines, with some characters appearing to be part of a larger sequence or list.

あつし

天正十二年尾刈 長久手 合戦

了 信長を討つ

同十八年相別 小田原陣

信長を

長久手 陣 信長を

川を

元和五年六月十四日六十二歳で

死す 法名 淨徳

宣重

牛久保 生國武蔵

元和九年より

將軍家より侍之りしに

寛永十年二月 作とす

小十人の能くとも

心盛

市島康尉 牛久保山城

寛永九年

將軍家よりつとくく戸川は

家故 九の内よ^まるの^まり

● 某

太田ヲ

家内ノ

中園ノ甲斐ノ

武田ノ信玄ノ子ノ之ノ鉄炮ノ大将ノ

身ノ

昌安

純渡 土國回前 法名獨敏道本
信玄 信州川中橋の代
官職を川を勝頼没落
東照大権現 湯 川
甲別 領地をいふ

信昌

之内 中園回前

勝頼 湯 川
湯 川

大権現 湯 川

天正十八年 関東沖入園のとき

巖命 湯 川 城の書

川

長五年 其田陣のとき 信昌

信州 湯 川

為命なりのみことをたすけり

右德院みぎのちかへ供養くわいじやうせり

同六年どうろくねんに死しす

右重みぎのしげ

勅みかど左衛尉さゑゐり生國なまくに同前

大指おほさし理り

右德院みぎのちか殿どの

將軍しやうぐん家けより勤仕きんじしつゝ下川しもがわに

寛永かんゑい四年よんねん十二月じふにがつ十日じふにちに死しす

六十むそ四よ歳さい 法名ほふな梅安うめやす淨室じやうしつ

右次みぎのつぎ

七なな右みぎ衛尉ゑゐり 生國なまくに同前

右德院みぎのちか殿どの

將軍しやうぐん家けよりつゝ下川しもがわに

右宗みぎのむね

九ここの右みぎ衛尉ゑゐり 生國なまくに同前

吉家

將軍家リ一ツ二ク三ク四川五家

小兵庫尉 廿四河内

將軍家リ一ツ二ク三ク四川五家

吉竹

長七郎 廿四武藏

將軍家リ一ツ二ク三ク四川五家

吉久

勅九郎 勅左馬尉 廿四武藏

元和九年ノ事

將軍家リ一ツ二ク三ク四川五家

寛永十二年二月三日ノ死

歳三十一 法名心安ノ禪ノ春ノ

吉正

勅九郎 生國同安

寛永十三年在久が遺体をつま
將軍家よりつゝくく川にゆ

安正やすし

又古志の尉 生國甲斐

慶長十九年より

在徳院殿よりつゝくく川より房別

よりつゝくく御代友職をつとむのち

將軍家よりつゝくく川より御代

の管作の事と川と志

寛永十八年より死を六十之歳

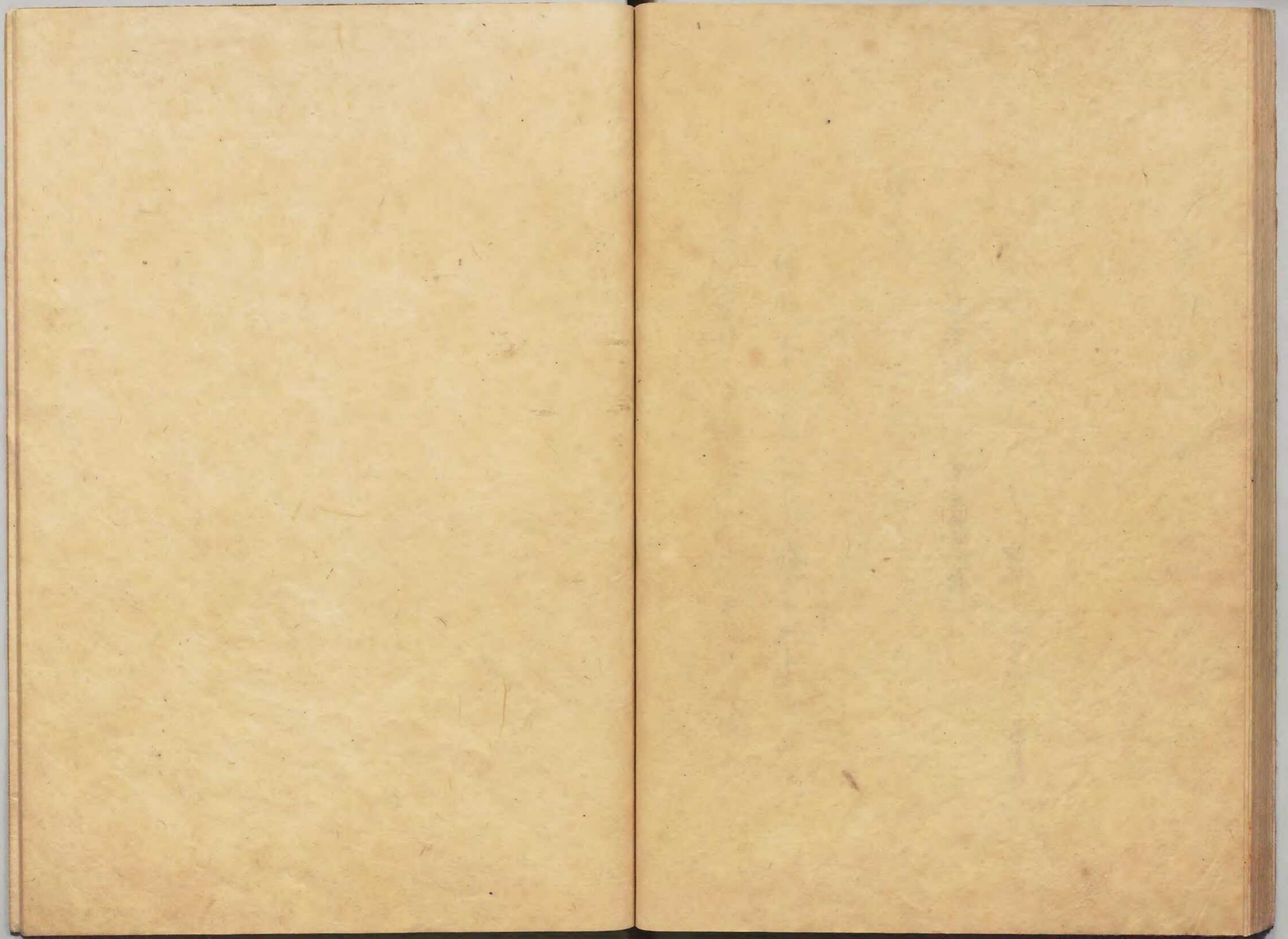
貞正まさよし

藤古志の尉 生國武尾

安正の養子とあり実ハ系原基たあが

子あり

家紋 在巴 貞正まさよし 在在まゐ



● 重光 チカラ

次郎在集射 廿四式花 いさし 法名清光 きよみつ

太田 おの

本名之務と号と

康直 やすちか

次郎在集射 廿四式花

重吉

左兵衛尉

十四回安

東照大権現よりつるく川

伏見に在る

重元

左兵衛尉

十四回安

右徳院殿よりつるく川

將軍家よりつるく川

康儀

兵五郎

十四回安

右徳院殿よりつるく川

康重

太郎左衛尉

寛永十二年より

將軍家よりつるく川

家
改

鎬か

矢や

俊綱とくに

足利太師

成行なりゆき

秀卿ひでゆき七代

足利太史あしひのたし

太田おくだ

有綱ありつな

部屋戸七郎べやどのしちらう

康綱やすつな

佐野又太郎さのまたたろう

信綱のぶつな

木村之郎きむらものらう 左衛門尉ざゑもんゑい

廣綱ひろつな

阿常あつね 小四郎せうしやうらう 氏部うじべ 左衛門尉ざゑもんゑい

秀頼ひでたか

太田おくだ 四郎しやうらう 母はは 八はち 山やま 守まもり 行政ぎやうぎやう 女め

此こゝ 回まわ 中ちゆう 絶ぜつ

信盛のぶかつ

新あらた 左ひだり 東あづま 門かど 法はふ 名な 光みつ 盛もり

東照とうてう 大おほ 権けん 現げん

台たい 法はふ 院いん 殿てん

将軍しやうぐん 家け 了りやう 一いつ 二に 三さん 四し 五ご 六ろく 七しち 八はち 九く 十じゅう

